

龍風柳多留全集二

自一四篇
至二七篇

岡田

岡田甫校訂

誹風柳多留全集二

自一四篇 至二七篇

三省堂刊



誹風柳多留全集 二

昭和五十二年一月十五日 初版第一刷印刷
昭和五十二年二月一日 初版第一刷発行

校訂者 岡田 甫（おかだ・はじめ）

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

発行所 株式会社 三省堂

〒一〇一 東京都千代田区神田神保町一の一
電話 東京（〇三）二九三―三四四（代）
振替口座 東京六一五四三〇〇

誹風柳多留全集 二

目次

誹風柳多留

十四篇	一
十五篇	二五
十六篇	四九
十七篇	三
十八篇	五
十九篇	二九
二十篇	二四

二十一篇·····	一五
二十二篇·····	一六
二十三篇·····	一七
二十四篇·····	一八
二十五篇·····	一九
二十六篇·····	二〇
二十七篇·····	二一
第二卷編集メモ	二五

柳
多
留
十
四
篇

安永八亥年刊



……【一四・一】

ゆびをさす方へひろける乳母が傘

安五・梅 1

下女をさし置いて娘に茶を出させ

◇・◇

ものゝまじわりもするむすめ也

◇・梅 2

手をとれハ生酔とかくふりはなし

◇・梅 3

他人宿とつてこし屋のむすめ出る

◇・◇

耳へ口あて間男へいけんなり
(改)かな釘とめゝずと下女へとりかわし(一〇・七)

安五・梅 1

四ツ手うぬまてと生酔貳町跡

◇・◇

入ル時に成ッて尋る娘のじゆず

◇・◇

座頭の坊山ほとゝきす初かつほ

◇・梅 2

×

▲ (安四・松 3)
(拾四・28)

▲

▲

○

○

牛後

関も無イはづ御二人リで小百万

安五・松 1

乗合で皆のぞかれるくわいらいし

◇・◇

ゑんこうが月だと涎るけちな客

◇・◇

あんどんへ寄りかゝるのを下戸とらへ

◇・◇

ほぐれ口唐とうつくへにて文を書

◇・松 2

大道ウで生酔金をかせといふ

◇・◇

こりやあ馬こりやあきりだとあきれた子

◇・◇

おいらも出ましやうと女房いやみなり

◇・松 3

たはこ入たつねるふりでつめる也

◇・◇

……【一四・2】

太神樂仕廻ふとしゝをメころし

安五・仁 1

御女儀の御無用と堀でたつて留

◇・◇

おかしさハすけん紅葉をうつて出る

◇・仁 2

しうとめの盃嬢の紙でふき

めしてもくいなとわひことかへる也

今度出やるとそういふとぬるいはゝ

なぜ急ッにいるへと女房ぬわぬ也

方々くへ無沙汰だらけで母に成

ひん出してくんなと頼ゝせなかの子

○

【拾七・22】

【拾七・23】

女房ハ風月の友をわるくいひ

安五・梅3

おめへがたよくをしりなと遣りていひ

〔拾七・22〕

御國からじよさいのながいが昨夜つき

驚をかわいそうにと母あがい

はい込ふとどろぼうといふむこいやつ

四ツほんだよと五二べたをほうり出し

まおとこの外に留守中別義なし

ひやめしのきんみがすんで米を出し

けんとうを聞いてぬかみそていしゆ出し

……【一四・3】

人もおしとハかめきくが事と見へ

客まさにやらんとすその声かなし

くわりよくらんしんのかたるたいこ持

かくあらんとそんじ羽折持参也

あの四ツは六郷さまと四ツ手かけ

四ツ手かご札所をさけびノかけ

五条坂合羽屋の子はうんがなし

らうそくににたものを出す百旦那

かこいものどかぐいしたりかつへたり

つらい事すけんの思ふまへもあり

安五・宮3

めうがせん出して嬢女をそしる也

あるかくなうそでハ女房もふくわす

松の木の下タへやつべしはつて出る

兩がんのあきらかなむこ二人りとり

暮のさま麻上下ではなすなり

やもめでおくがふびんさに金に金

らうがいがふたあつ来たとてんがいや

十二ひとへハ急度した鞠のじやま

……【一四・4】

上總からしつせいたんの風でのり

おやにつめられてハ娘よろこばす

けんぎやうも出来て乞食もそのよ出来

四十一で持つて一ツ家一人りふえ

かゞみのゝ字をぬいてときに出る

おぬしゆへどろぼうよりさされるハな

もふおれもよしにしましよと子房遊

見物のよいに寐かねてしかられる

何ばか城をまくらとどろろく

せんとのもこないと御用立ッて居る

安五・梅4

にわか雨首かせなどで通るなり

・ ・

よしのとけおれ^{げ(万)}こんで後家大さわざ

・ ・ 梅1

三會めもつとこつちへ寄な也

・ ・

うしハものかわとかげまへつほねいひ

・ ・ 梅2

花も少シはとむくじる銀きせる

・ ・

うかれてるつらを見たいと女房いひ

・ ・

耳のあかほりく顔をよつく見る

・ ・

羽衣をうたひ切^んのに女郎來ず

・ ・

……【一四・5】

ちよつとしたちあかごかきに道をき

・ ・

朝かへりうしろめたくも茶屋がつき

・ ・

とりつくといわれてむすここまる也

・ ・

ぼうふりとごせに御そうの役^{へ(二)}ふそく

・ ・

目黒からいゝわけの無^い品が出来

・ ・ 梅3

うとん屋のばゝあくじらのはなしする

・ ・ 梅4

おいしい事よしさねげくわにかけ^{と(末)}るはつ

・ ・

品川のもん日へんがへもうごなり

・ ・ 言(万)

官嶋のけしきをしやべるきついねつ

・ ・

百も貰ふ氣で淺瀬をおしへたり

安五・梅4

ひでさとハみかどのやうなものをゐる

・ ・

出合茶屋かり人は御ぜんかごてより

・ ・

おちぶれるものハかつほのねたん也

・ ・ 安五・梅1

ふみやくといふほどにもつて出る

・ ・

品川のうそは古川やくし也

・ ・

さいくわひを^てごして大門からわかれ

・ ・

おたふくめたまれと持参しかられる

・ ・

やうたい書^{キ(二)}に猫なとをしやらし

・ ・

……【一四・6】

おさらはをしなとせ中をうば^{し(万)}からけ

・ ・ 梅2

まれ人も御らんすらんにみけん疵

・ ・

やりてのさいそくいいたゞきやしやう也

・ ・

小侍ゑらい中ぬきはいて出る

・ ・

よふしおるさかいと手代はまる也

・ ・

かけ落のひるはやつぺしまがる也

・ ・

こふく屋の子もそくらに貳三人

・ ・

かめ菊が内にしん筆あまたあり

・ ・ 所(万)

着かやれといへばわんほう^{ほ(万)}うぬぎおろう

・ ・

袖の下遣ふねかひはぞうし谷

安五・櫻3

行たかる外にわる氣の無い息子

〃・〃

品川で狼之介とんだ事

〃・〃

しやうばんにしなのもさんりすべて立

〃・〃

(さ花の雨下女色あけをむごい事(二〇・七)能万(笑))

〃・〃

かんよさこせ間男をもつてゐる

〃・〃

兩がんくわつと見ひらいて親父まち

〃・〃

見せた外科見ると内義ハ逃る也

〃・〃

大門をつきやとは入ル屋かたもの

〃・〃

母いけんよやよくをぬけにいひ

〃・〃

……【一四・七】

相違無いそうてかつぎは持て行

〃・〃

こいとりといふなあの内義の兄だ

〃・〃

いつたいは下戸さと赤イ白でいひ

〃・〃

けいせいひのひつたくそを八百てうり

〃・〃

目出たさは武道勝利を得ざる也

〃・〃

世を捨る事めんとしく四ツ手也

〃・〃

のぞまれて姫壹本はめ貳本はめ

〃・〃

花姫のみやけは里へ生キ如來

〃・〃

しよくしやうをかくしおふせて御師を立

〃・〃

○

○(末二・10)

×(末二・10)

雨譚

雨譚

×

○

〔拾初・35〕

さるものハ日／＼にと後家はさかん也 安五・松1
民のかまとを見おろして四ツ手かけ 〃・〃
田をうへる姫でいちうのはちす也 〃・〃
悪筆へまつてくれるハ能書也 〃・〃
藤沢の品川(万) 〃・〃
品川の藤沢とまりあまり也 〃・〃
どこへみこしをすへよふと土手でいゝ 〃・〃
川中をわらじてあるくいかだのり 〃・〃
いろは藏いつちそばのがかの字也 〃・〃
藥札をふくの小言でつゝむなり 〃・〃
……【一四・8】

〃・松2

又てうし言葉と母にしかられる

〃・〃

かんりやくハとうるのおとゞきらひ也

〃・〃

けい馬さい中ウはなれ牛／＼

〃・〃

芝さまのお入とたいこなりわめき

〃・〃

かまくらへ行ク前川へすての事

〃・〃

ねじけ人もみち迄來ていやといふ

〃・〃

松の木の下できぬ傘しほる也

〃・〃

お物遠御用立(だち)傘とかき

〃・〃

生醉に嫁どこへてもあがる也

〃・〃

○

▲

×

○

×

×

×

×

○

○

▲

×

〔拾十・9〕

かくはなハ座頭みるめは姿多もん

安五・松4

おひでさんどふだとやうじみせへ来る

〃・〃

年に貳度でつちかしやくをまぬかれる

〃・〃

ばかりしい病氣女を見るもどく

〃・〃

三輪の神あげくのはてに無心也

〃・〃

豆めしのくいにげをするしよかつりやう

〃・松5

こいつだと孔子をうしろ手にしぱり

〃・〃

花に坪皿とハさすが下モ部なり

〃・〃

首斗ゆゝしく見へる本舛屋

〃・〃

……【一四・〇】

どつとせぬ神子で神さびわたる也

〃・〃

しりみやをあらつて息子内へ入

〃・〃

穴ぐらのはしごを引いてあやまらせ

〃・〃

もふわらふまいと新造かしこまり

安五・仁1

哥もよんだりふせきをもあそバされ

〃・〃

きの國やみかんのやうに金をまき

〃・仁2

仲人ハやれ幕をかせ琴をかせ

〃・〃

越ツの傘かりてちじよくをすゝぐ也

〃・〃

大内のふはむきになるめしをしい

〃・〃

○

〔末二・10〕

×

×〔拾五・29〕

×

×〔拾十・10〕

×

〔拾七・23〕

○〔拾十・10〕

〔安六・義6〕

〔拾八・27〕

はらの中迄も見て來ただるま也

安五・松2

一日にたらぬしごとへへびをませ

〃・〃

あいきやうをやりてのこぼすいたひ事

〃・〃

京都から見れハかまくら赤子也

〃・松3

めしひつをかくすが母の大おこり

〃・〃

れいしよりたつきハふりがきつい好

〃・〃

あきとのハはむきがいと源三位

〃・〃

翠の上ねぎをいつけてにげる也

〃・〃

舟迄もほつそりしたが息子好

〃・〃

……【一四・10】

大なんぎわんを出さぬとベそをかき

〃・〃

妾がおや來てハしやうじをつつ通し

〃・〃

御一笑ツゝ内義がきさん

〃・〃

古着ばつかり買やつハぬれて來る

〃・〃

まゝ子こんじやうながきたとやり手いひ

〃・〃

すけん物小見世などへハ目はかけず

〃・〃

仁和寺の化ものみやくを見て貰ひ

〃・〃

犬坊はかみつくやうにくやしかり

〃・松4

死馬に針きんつらがいけんなり

〃・〃

手紙よむうち仕切場にてれて居る
ちと内へへめぐるべいと息子いひ
袖を留たが本寺迄はつとしれ
あかるい所へ持つて出るひきならい
金をふやすのがびわより妙手也
下女が笑ふと産所でもしへく
駕しよつてかける向ふて茶字をぬぎ
どつちらがりこうか土手てわかれたり
かけねなし一ト山三步つゝにうり

……【一四・11】

當分ハかしま参りと母はいひ
子曰おふくろをあやなしやれ
馬の行方へのつてくにわか武士
蔦の葉をひつさいて嫁とれにしやう
御めかけをそしり座頭でくちはてる
はゝあきやつめだとかんづく旅かへり
神樂堂夫らしいへぶつつける
さがされてくすぐつていと子をかへし
是はあざ是は青二とわるいやつ

妾にすんださたきくと金主來る
そこらぢうさわかせは入ル初のどら
珍客と見へてとうふを縄でさげ
おいしい事かまより嬢がうづもれる
おかしさハ皆がねらつた後家が剃
何が出たかのぞきの子とも笑ひ
九年母とひじきを下女はかさへあけ
もはや置かれず十ヲを六文く
こわそうに後妻ひとつぬい直し

……【一四・12】

むりむたいの所にごふくやの庭
火のみやくらの正面が三步なり
はいとうのねたりにうせぬ嬢をとり
柿こづきを聞ていしやにしかられる
わるごすいおかみさんだとぬかやいひ
くどくやつおぬいがそばてじやまがられ
ちんぼこへ火がはねるよといかけいひ
ぬか袋下女は目鼻をつかみよせ
人をくみ出すと井戸がへ仕廻い也

なんぼべい出せばおろすとせなこまり
柿ぬす人めを見つけたとしりをふき
ばかかたい子だとめかけの母しかり
ちう三の一チぼくつれるはやり風
死ぬものゝそん女郎やはうかむ也
口をそろへて江の嶋へいつたぶん
旅人のぶんハ杓子であてかわれ
花さかり一日男世帯なり
たからくらべを姫がする暑イ事

……【一四・13】

女房と相談をして妻を去り
にげ込みを見ておかしがる歳暮客
張りものをする所へぬれてかへる
盃を三みせんひつたくつてさし
かん定づくで疊のうへのをかい
格子からそりやなげるよとあまい母
袖で口かくして茶臺ふり上る
やむ事を得ずこのわたをみんなのみ
鼻うたでぜんしやう門をかついでく

にわか雨ひるねのうへゑほうりこみ
下女か事一日おりんやかましき
蚊や釣った夜ハめつらしく子があそひ
どふぞして仕廻ったか後家ちゝが出る
樽ひろいしやうしんおちにくらハさせ
もふことし貳人かけおちわるひ内
法事からはしめてとまる里の母
姫の生酔御しゆでんをひけらかし
まどへ來て遊子ノ〜と呼いだし

……【一四・14】

おかしさハすけんの女房りん氣なり
いんぐわなやつだなどすて子あやす也
やすいてうぶく足あとへきうをすへ
目見へだに見へて小袖できうじ也
うるさゝハあねいどふじやとこしをかけ
となりさじきのまんちうをねだる也
平皿をふたつつつける極こん意
わんの中からまゝ母の良を見る
村きおいつくり酒やをぶちこわし

こわいものなし藤沢へ出ると買イ

土弓ある御用時くうしろみる

ゆふべにたとうふ目きゝが五六人

まんぢうへ小僧だまつてゆびをさし

門ト出に坊主にあふがなつなうり

おこまりかなと雨ふりの子をあやし

すけんさんそれじや千住とわらはれる 安五・七₂

吉原見物ならつてがあるぞへ

梅若へ行のハうそでよしにする

……【一四・15】

安い三みせんハたいこのかわではり 七₃

たちねの爲にはらからおどるなり

たつた拾兩きんしたとふとい事

くたびれて供のなき出す安礼者

下女くぜつ布子のそでをしほる也

人參は行長どのに見てもらや ひぢ

一國な所と田町の床 いふ

とりの町江戸をくらつたどうがみへ

なきなから奉加をかへす樽ひろひ

ぶつまねはにきりこぶしに へいきをかけ 安五・七₅

かみゆひに成ッてかげ清ねらふはづ

おのしもぐるでかくしやると御しんぞう ぬ

江戸のまん中へうろたへもの貳人

りちぎまつほうなつらにてぶんごぶし

てんこちも無イ事めうゑおもひたち

是からハおれがすきだと三日いひ

二ツどうぐらひハ直キと子房いひ

壹人ものけちな出合イにかりられる

……【一四・16】

へいごしにおかむくと下手のまり

加茂川の水でもいかぬ色があり 安五・七₁

おこうのまへに面白く一度着る

のるものハ落おどるものころぶなり

もち見世のさわぎせなかをくらハせる

公家はしをかけて僧正よびたてる

口かいやさきに九代迄しつじしよく

ゑんたんがしちむつかしく出来かねる

青そらのたしない時分ほとゝきす

〔拾十・10〕

雨譚

玉露

〔拾七・23〕

雨譚

雨譚

りに勝て女房あへなくくらハされ

安五・巻3

御めんかご中に細見よんでゐる

・ ・ ・

供べやに何疋あるとりやうり人

・ ・ ・

ばかでやりやめのこかあゝと夜そばいひ

・ ・ ・ 巻4

あわ雪で又貳三本さしをなげ

・ ・ ・

しやぐわんくとかばたいをたゝむなり

・ ・ ・

大きなかわはなをゝ馬のけつへつけ

・ ・ ・ 巻5

藪こうじいしやの住ゝにハわるい所

・ ・ ・

はやがわり牛町からハばんふ也

・ ・ ・

……【一四・17】

もてぬやつ尻をいじつてしかられる

・ ・ ・

やうらうの瀧迄下タにくゝなり

安五・巻1

草木きばみ落てかこつけもなし

・ ・ ・

口のこをはねてけんぎやう金をかし

・ ・ ・

小兒いしやひとつのきざハこわい顔

・ ・ ・

うちわでハにくらしい程たゝかれす

・ ・ ・

きやつくとないたがぬゑハ本の事

・ ・ ・

又春といやるかと母すみをすり

・ ・ ・

酔とねやすとまへ置のそながさ

・ ・ ・

上下でかみゆひしかりつけられる

安五・巻1

たいまいの金を妾はさして居る

・ ・ ・

首すきう流れるやうな大井川

・ ・ ・ 巻2

くわいゝのくわいと下野さしてとひ

・ ・ ・

ちとはやふあるきやいのふと牛を追イ

・ ・ ・

かゝあはなさつたハやいといぢらしさ

・ ・ ・

きついやつゑもん坂からはづす也

・ ・ ・

よし時はいちよくのつみで御座りやす

・ ・ ・

尻を高くしてぶつかけ娘くひ

・ ・ ・

……【一四・18】

きぬ張でおひ打にするにくい口

・ ・ ・

品川のかたうでになる源五兵衛

・ ・ ・

官女が居ても名のたゝぬかたい寺

・ ・ ・

佛といはれたハめかけ壺人なり

・ ・ ・

もろこしへびたもやらぬは源氏也

・ ・ ・

どろ坊となんだあなばたおつかける

・ ・ ・

壹本傘かして小言トて内に居る

・ ・ ・ 巻3

はんぞうは血をはきそうな軍師也

・ ・ ・

三ツふとんうそをいふならはしご也

・ ・ ・

○

○【拾四・30】

×

【拾四・30】

×

×

▲

○【拾四・30】

×

むだあしを一日置にこんやさせ

安五・禮3

×

三年の古きずをみる本望さ

〃・〃

御一所にいたしましよふとひらのふた

〃・〃

〔拾初・35〕

あじな晩三歩の口はうれのこり

〃・〃

〔拾七・24〕

山がたとなりくだものがおいしいなり

〃・〃

こゝいらへ見世を出そうと御針いひ

〃・〃

さくらをはどれも御てんの跡へうあ

〃・〃

ゑをかわぬがたかの羽のおちどなり

〃・〃

米かみのうごくをたいこ見つけ出し

〃・〃

……〔一四・19〕

そへ乳してたなにいわしが御座りやす

〃・〃

麥めしを喰ったかわりにもとめづか

〃・〃

小田原を目あてに御そうかける也

〃・〃

と出たところハすけんとみへまいの

〃・〃

壹人もはやれ茶をくれろ火をくれろ

〃・〃

こんにやくと酢で仲人はあいられる

〃・〃

たましてもいけんとていしゆ外でいひ

〃・禮4

かわらけへとなりの書物きざみ込

〃・〃

黒かもをはじめてつれてふりかえり

〃・〃

母壹人リ古イやく者のひあきする

安五・禮4

こわめしのはらですけんをしてあるき

〃・〃

たま虫のはつてあるくをせなあくれ

〃・〃

しりもち以來とちゝぶは和田でいゝ

〃・〃

さじのゑてありをかきゝかけんする

〃・〃

かみゆひのひまはおふくれおくれ也

〃・〃

下女が鼻うた臺所のすゝがおち

〃・〃

くわんおんハ遣ひのある佛也

〃・〃

五十でんゝのくりきにろじがこみ

〃・〃

……〔一四・20〕

藪いしやのとくハにげるが目に立〔礼〕す

〃・禮5

留〔客方〕めるなよ佛がくるといゝは茶や

〃・〃

どつからか御用きせるを出してすい

〃・〃

出来合の武士うれ切〔礼〕るまつの内

〃・〃

うりものだなふらしやるなとせげんいひ

〃・〃

青銅拾〔礼〕定めしも喰酒〔礼〕のみ

〃・〃

六枚でばつたゝところす也

〃・〃

一チ女出世して九ツそくうかむ也

〃・〃

十四からこしやくな御子ともふいハず

〃・〃

玉簪

〔拾四・30〕

〔牛後・拾十・10〕

○〔末三・12〕

▲〔拾三・25〕